

古清規について

大石守雄

(一)

中國の禪宗は初祖達摩、二祖慧可、三祖僧璨の間は主として頭陀を行じ、長く一處に定住せず、又多數の弟子と共にすることもなほ生活をしてゐたから、禪宗としての行持作法も定められることはなかつたのであるが、始めて清規なるものが現れたのは、四祖道信（五八〇—六五一）から五代百丈懷海（七四八—八一四）の手に依て漸く成文化されるのである。

私はその淵源は恐らく四祖、五祖に遡つて求めらるべきものであると思ふ。それはそもそも清規の如き生活規範は集團生活の中に於て胎生するものであらうし、また集團生活の規制を大きな役割として持つものであらうと考へられるからであつて、百丈懷海が清規を創めた時、それが全く百丈自身の獨創になるものであつた筈はなく、既に集團的修行生活の久しい歴史を持つていた叢林に現れた生活規定をとつて彼の清規の根幹となしたであらうことは容易に推測出来るのであるが、この四祖、五祖會下の修行生活については明確なる資料が存しない。唯六十年間五百餘人が常に同一處に在つて團體生活をしてゐたといふ多人と多年との二事實

に基づいて、その人々が長期にわたり信施のみに頼り得ることになからうし、官給があつたわけでもないから、自然に自給自活の方法に依て禪修行をなし、従つて自治的な生活機構も成立してゐたのであらうと思ふ。私は此處に禪宗の清規の内容となるものが胚胎してゐた歴史的必然性を認め得ると思ふ。

斯く見ると叢林に於ける生活規範は黃梅弘忍（六〇一—六七四）の會下に至る間にその形をとつて來たもので、それが更に大鑑慧能（六三八—七一三）、及び南嶽懷讓（六七七—七四四）、馬祖道一（七〇九—七八八）、と經て百丈懷海に至つて始めて成文化されたものといふことが出來よう。處が古來より

一日不作一日不食之言流播寰宇矣
と傳へられ

（註三）
禪門獨行由百丈之始

と稱せられる。百丈懷海の制定せられる所を編纂せる清規書が存在し、禪苑清規以下現存清規書の基礎となつたのであるが、今日では不幸にして散佚して居るのである。これに付いては木村靜雄氏が「古清規序」に景德傳燈錄（一〇〇四）卷六百丈懷海禪師の「禪門規式」と、現存最古の清規書の禪苑清規（一一〇三）卷十

の「百丈規繩類」と、更に勅修百丈清規（一三三六）卷四の楊億述「古清規序」等に依て文獻的考證をして居られるが、其の他大同小異とは云へ、景德傳燈錄に遡上ること十六年に贊寧撰宋高僧傳（九八八）卷十「唐新吳百丈懷海傳」又同じ贊寧述の大宋僧史略卷上「別立禪居」にも述べられているのである。

然るにその百丈清規は全く失はれ、早くから既に傳はらない。

勅修百丈清規の卷末の百丈山東陽德輝の跋文を見るに、詔を受けて之を編むに當り、宗賾の禪苑清規（一一〇三）と、惟勉の叢林校定清規總要（一二七四）と、式威の禪林備用清規（一二一一）の三清規に據り、然も

百丈清規行于世久矣。緣唐迄今、歷代沿革不同、禮因時而損益、有_レ不免焉。往々諸本難出、罔_レ知適從、學者惑之。異時一山萬禪師、致書先靈翁約_二先師_一共刪修刊正、以立一代典章、無_レ何三翁先後皆化去。區區竊欲繼_二其志_一而未_レ能也。受_レ命以來旁求_二初本_一不_レ及_レ見

と云っているのを見れば、百丈清規は傳寫の間に諸本が難出し、異字異文が多くなつて、適する所を知らない程になり、百丈清規の原本は、既に散逸したから、三清規に依る外無かつたことを示している。又同書の卷末の一山禪師書なる文に依れば

百丈晦機嘗_レ就_二至彼中舊清規_一閱_二之其間紕繆殊甚約_一共刪修とあるから、晦機元熙（一二三八—一三一九）が百丈山に住した頃には、猶未だ百丈清規が、百丈山にあつたので之を彼の中の舊清規と云ふのであらう。そしてそれを晦機が一山萬に送つたのであるが、紕繆が多かつたから刪定して刊行せんとし遂に果さなかつたのである。勅修百丈清規を編した東陽德輝は、晦機を先師と

稱するのであるが、德輝が百丈山に住した時には、百丈清規はもはや無かつたと見える。これは如何にもあまり早く失はれ過ぎた様である。晦機自身の延祐元年（一三三四）に書いた記が、勅修百丈清規の卷末の一山禪師書の末にあるが、これは咸淳の間（一二六五—一二七四）に一山兄と小弟寧と靈屋兄と相會したが、今二人死し

……欲_レ將_二古規_一刊正立_二一代典章_一今誰_レ同心哉

と云つてゐるから一二六五—一二七四年頃迄には百丈清規が存し德輝が勅修百丈清規編纂の勅命を受けた元統三年（一三三五）には既に無くなつていたと云うことになる。即ち約六十年の間に失はれたことになる。

然らば百丈山には、晦機の時、百丈清規が一本しか無かつた様に見えるのである。清規は寺々の事情や、又それを行_二う人の境遇_一、性格などで變化せられ易いから百丈清規が天下に行はれながら、百丈清規そのまゝでなかつた爲めに、百丈清規の寫本が他所には無かつたのであらう。更にこれは又百丈自身が只自己の開創せる叢林に自己の抱懷せる理想を實現せんとされたのみで之を全叢林に及さんとする様な野心が無かつたのと、一はその精神のあまりに純粹峻嚴な爲め普遍性を危まれた爲めではなからうかと想像される。それはあくまで修行中心なことで、犯罪者の擯出法など記されている點より云へると思う。

又咸淳年間（一二六五—一二七四）以前に出来た禪苑清規、叢林校定清規總要の序文を見るに、

百丈規繩。可謂新條特地。（禪苑清規）

叢林清規。百丈大智禪師已詳。但時代浸遠。後人有從簡便。遂

至循習。雖諸方或不同。然亦未嘗違其大節也。……吾氏之有清規。猶儒家之有禮經。禮者從宜因時損益。此書之所繼大智而作也。(叢林校定清規總要)

等と言ひ、古清規の實在を明白に實證する語句は見當らないのである。此等は何れも古清規の由來する所が百丈にあることを述べ、己が出據を明かにしたに過ぎないのである。

(二)

爾來百丈清規の原本は見られないことになった。従つて現今古來の百丈清規がどんなものであつたかは「禪門規式」「古清規序」等に依て推定する外はないのである。然して禪苑清規の卷尾に百丈規繩頌として「禪門規式」の全文を擧げ、それを十一又は十二段に分ち各段に頌を付している。但し十二段は更に他の文と共に一段をなし、次いで三十段の文と頌とを擧げている。此の段落に従つて文獻の考證を試みつゝ宋高僧傳、大宋僧史略の文と對照して百丈古清規の内容を推定して見たい。(便宜上禪苑清規の百規繩頌を底本として、景德傳燈錄卷六百丈傳の禪門規式を傳繪本。勅修百丈清規卷四の古清規序を勅修本と呼ぶこととする。)

(一) 按百丈大智禪師。以禪宗肇自少室。至曹溪已來。多居律寺。雖三則別院。然於說法住持。未上合軌度。故。常爾介懷。乃曰。祖宗之道欲誕布(五)。冀其將來永不止泯者。豈當與諸部阿笈摩教(六)爲隨行耶。舊梵語阿含新云三阿。或曰。瑜伽論璣珞經。是大乘戒律。何不依隨耶。師曰。吾所宗非局(七)大小乘。非異(八)大小乘。當博約折中設(九)於制範。務其宜也。於是創意別立禪居。

古清規について

(一) 傳灯本勅修本になし。(二) 傳灯本になし、勅修本には「雖列三別院」とある。(三) 傳灯本、勅修本は「規」としている。(四) 祖宗之道を傳灯本は「祖之通」、勅修本は「佛祖之道」としている。(五) 傳灯本勅修本は「化元」とする。(六) 傳灯本勅修本は「翼來際不泯者」とある。(七) 勅修本には割註なし。(八) 勅修本傳灯本には「胡」とある。

宋高僧傳には

海既居之禪客無遠不至。堂室隘矣。且曰。吾行大乘法。豈宜以諸部阿笈摩教爲隨行耶。或曰。瑜伽論璣珞經是大乘戒律。胡不依隨。海曰。吾於大小乘中博約折中。設規務歸於善焉。乃創意不循律制別立禪居。

とある如く、特に「不循律制別立禪居」となすから、禪院の清規が從來の律に據つたものでないことを明示している。更に又大宋僧史略には

達磨之既行。機鋒相構者唱和。然其所化之衆唯隨寺別院而居。且無異制。道信禪師住東林寺。能禪師住廣果寺。談禪師住白馬寺。皆一例律儀。唯參學者或行社多糞掃五納衣爲異耳。

とある。少室山の初祖達磨以來六祖曹溪慧能に至るまで律寺に居たと云はれるが、實はさうとのみは云へないのではない。達磨は晩年九年間は嵩山少林寺に居たが、それ以前長い間は何處に居たのか判明しない。少林寺はもとく佛陀跋陀の禪の道場として建立せられたもので、必ずしも律寺ではない。二祖は初祖に少くとも九年間は少林寺で隨從したが其以後は鄴都に出て、而も何

處に居たか明確ではない。北齊。北周の破佛の時六年間は舒州皖公山に在て山谷寺附近にいたが、再び鄭都に歸り、其際も何處に居たか知られていない。三祖は鄭都にもいたであらうと思はれるが、其後は二祖と共に皖公山に在りて獨り居残つて司空山の附近を往來していたらしい。初祖、二祖、三祖は主として頭陀行をなして居たから同一寺に永住するとか、大衆を集めて接得するとか後世爲される如きことを爲したのではない。従つて律寺に居たとは云へない。四祖と五祖とは主として黃梅の雙峯山に住して、寺が律に基付いて出來て居る點で一般の寺を指す意味であるとすれば、寺に居住すれば皆律寺に居住したことになる。

結局初祖以來禪宗寺院としての特別の寺院が無かつたから、便宜上一般的の寺院の中に在つて而も院を分つて居たのであると云う意味に見ればよいであらう。然し四祖、五祖は殆ど同一處に居ること六十餘年であり、常に五百人、千人の會下を擁して居たから、恐らく此の間に禪宗としての特有の行持が行はれ、儀式作法も整へられるに至つたのであらう。六祖も曹溪山に於て之を承け之に倣つたであらうし、南嶽を経て馬祖になれば八百人の會下を容れて、殆ど禪的道場としての凡ては成立していたのであらう。

然し此處では要するに、規矩が確立せぬために一部の者は律院に居たのであらうから、たとひ院を別にしたにしても全體としては、律制に準ずる爲に、禪宗的には軌度に合しなかつたから「非局三大小乘非異三大小乘」當「博約折中、設於制範」務「其宜上」也。にて全く新しい清規を作り禪院の獨立をなしたのである。此の點に於て百丈清規は嶄新的な意義があるものであり、此處に禪宗が完全に支那佛教化されたと思ふ。

(二) 凡具三^(一)道眼^(二)有^(三)三^(四)導之德^(五)者。號曰長老。如^(六)西域道高臘長呼須菩提等之謂也。既爲花主^(七)即處方丈^(八)、同淨名之室、非私寢之室也。

(一) 傳灯本勅修本には「尊」とある。(二) 勅修本には「即」とある。

宋高僧傳には

初自達磨傳法至六祖已來。得道眼者。號長老。同西域道高臘長者呼須菩提也。又長老居方丈。同維摩之一室也。とある。長老は小乘律では僧臘十年以上のものであるが、西域印度では臘高き者を須菩提と譯して善吉、又は善現と云はれ、佛弟子中で須菩提は解定第一と云はれ、又無諍三昧を得ること最第一と云はれる點より起つたのかと思はれる。或は經典に常に長老須菩提とあるから長老が即ち須菩提と稱せられるのであると云つたのかもしれない。つまり住持たり得るものを長老と稱する理で其の居室を方丈と名付けたのである。方丈は維摩、淨名の室にして私寢の室ではないのである。

(三) 不立佛殿^(一)唯樹法堂^(二)者表佛祖親受當代爲尊也

(一) 傳灯本勅修本は「樹」とある。(二) 傳灯本勅修本は「親囑」とある。

宋高僧傳には

不立佛殿^(一)唯樹法堂^(二)表法超言象也。

とある。これは禪院の構造を云つて居り佛殿を設けずして法堂のみを置くのを云うのである。法堂は住持長老の上堂陞座をなす所で、佛祖より親しく受けて當代の住持長老が尊とせられ佛祖に代はるを表はして居るのである。これは馬祖の云う、即ち即佛の

考へを具體化したものであらうと思はれ、達摩以來の禪者の意氣であり、又悟境であつたものである。然し當時すべての叢林が新しく建てられたのではなからうし、以前からの佛殿が存すれば叢林に於ても佛殿行事は自然に行はれたことであらうし、又一般に佛殿そのものの存在意義も認められねばならぬであらうが、ともかく百丈の根本趣旨とするところは佛殿よりも法堂を主とするものであつたことがわかる。

(四) 所寢學寮。無^(一)多少二無^(二)高下。盡入^(三)僧堂中^(四)依^(五)夏次^(六)安排^(七)設^(八)長連牀^(九)櫪架^(一〇)掛^(一一)搭道具^(一二)。

(一) 傳灯本勅修本にはなし。(二) 傳灯・勅修兩本には「施^(一)櫪架^(二)」とある。

宋高僧傳には

又不論^(一)高下二入^(二)僧堂。堂中設^(三)長連牀^(四)施^(五)櫪架^(六)挂^(七)搭道具^(八)一^(九)大宋僧史略には

有百丈山禪師懷海。創^(一)意經論。別立^(二)通堂^(三)布^(四)長連牀^(五)。勵^(六)其坐^(七)禪。又高木爲^(八)櫪架^(九)。凡百道具悉懸^(一〇)其上^(一一)。所謂^(一二)龍牙^(一三)杖^(一四)上也。

とある。法堂に次いで學寮を中心として叢林の全成員が共に坐禪を修する僧堂を立て、その内部の機構を整へたのである。身分の高下を論ぜず學寮は凡て僧臘に従つて順位を定める。夏次は僧臘を數へるには夏安居の數に依るから僧臘を指し、其の次第に依て安排して位置が定められるのである。此の點に修行中心主義がよく現はれている。

(五) 臥必斜^(一)枕牀^(二)。右吉祥睡者。以^(三)其坐禪既久^(四)。略^(五)偃息^(六)而已^(七)。

宋高僧傳には

古清規について

臥必斜^(一)枕牀^(二)。謂^(三)之帶刀睡^(四)。爲^(五)其禪既久^(六)。略^(七)偃息^(八)而已^(九)。大宋僧史略には

坐^(一)歇帶刀斜臥^(二)とあるから、長連牀は坐禪する床であり、斜臥は坐禪の歇んだ時なすものである。帶刀斜臥は帶刀睡と呼ぶ點で斜枕牀の臥睡である。

(六) 除^(一)入室請益^(二)。任^(三)學者勤怠^(四)。或上或下。不^(五)拘常準^(六)。

入室は學寮が住持長老の室に獨參して參問すること、請益は住持長老が參學者に教示することであるが、參學者が益を請ふから師家が與へる點で斯く名付ける。「有^(一)三朝參^(二)。暮請^(三)之禮^(四)」(大宋僧史略)とある如く、朝夕に之を行うから、之を除いては坐禪の勤怠を學寮に任せたと見える。「或上或下」は前の高下と同じ意味から然らば。上を先にするか、下を後にするか常準が無いと云う意味かとも考へられる。學者は學寮、參學者と同じで修行者の事である。

(七) 其闔院大眾。朝參夕聚。長老上堂^(一)。隨堂^(二)。主事徒衆。雁立側^(三)。聆^(四)。寶主間^(五)。酬^(六)。激^(七)。揚宗要^(八)。示^(九)依^(一〇)法而住^(一一)也。

とある。文中に長老、主事、徒衆、との三段階が現はれているのを見るのである。その中で、長老は住持を指し、主事は叢林の共同生活を運営する爲の種々の分職であつて、後に知事と呼ばれるのに當る。つまり叢林の幹部と目さるべきものである。この分職の種類に付いて百丈清規の原本にどれだけの名が擧げられていたかは不明であるが、此處に後代の上堂の兩班の起源をうかがひ知ることが出来る。又後世の住持の傳法が尊重される理由が明確にされている。

(八) 齋粥隨宜。⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾其節儉者。表法食變運也。行普請

法。上下均力也。署⁽⁴⁾十務。謂之寮舍。每用首領一人。管多人

營事。令各司其局也。主飯者自爲飯頭。主菜者自爲菜頭。他皆倣之。

(一) 傳灯本勸修本は「通者」とある。(二) 勸修本傳灯本

には「務三子……」とある。(三) 勸修本傳灯本にはなし。

宋高僧傳には

隨宜示節儉也。行普請法。示上下均力也。

とある。齋は午食。粥は朝食の二食で賓主が均等に食し、節儉に

務めるのは、食あらば法が修せられ、法が修せられれば、食が到る點

で法食變運を表するのであらう。普請は作務のこと、師も弟子

も凡て之をなすから力を均しくするに外ならぬ。百丈の「一日不

作。一日不食」がうかがひ知る事が出来る。「置十務」の十務は

明確ではないが下文に飯頭、菜頭及び侍者、維那などが見えて居

るのみである。このうち維那は衆僧の修行生活一般の監督に當り

進退威儀の指導もなすのであるが、これは後に知事の一人に組入

られている職名であつて、禪苑清規には維那に並んで監院、典座、

直歲の名も見えてゐるから、恐らくこの三者も百丈清規の原本に

は記載されていたものであらうと想像される。飯頭、菜頭はやは

り後世の知事の下に位した、頭首の一員と考へられる。此れにつ

いては割註には「主飯者自爲飯頭。主菜者自爲菜頭。」とある

のみであるが、その後に「他皆倣此。」とあるから他にも頭首に

相當する役名が種々定められていたのであらうと推知せられる。

大宋僧史略に

有朝參暮請之禮。隨石磨木魚爲節度。可宗者謂之長老。隨

從者謂之侍者。主事者謂之寮司。共作者謂之普請。

とあるから主事は寮司で、寮司は飯頭などを指すのである。侍

者は住持、長老に侍する者である。更に大衆は凡て石磨木魚に依

て律せられたのである。

然して叢林の建物として寮舎が置かれてゐる。これは後には庫

裡と呼ばれてゐるもので諸般の寺務を司る場所である。以上叢林

内の建造物を總合して見るに、方丈、法堂、僧堂、庫裡の四つが

ある。此等の配合に依て叢林内の境內が構成されてゐたのであら

う。此の四つの名稱と配置とが定められ、夫々の持つ役割や内部

の規範が一定の形をとつたのである。

(九) 或有假號竊形混于清衆。竝別致喧擾之事。即堂司維那

檢舉。抽下本位掛搭。擯令出院。普貴安清衆也。

(一) 堂司を傳灯本勸修本は「當」とする。(二) 傳灯本勸修

本は「者」とする。

(十) 或有所犯。即須集衆以柱杖杖之。焚燒道具。逐從偏

門而出。者示耻辱也。

(一) 或有三……を傳灯本勸修本は「或彼有三……」とある。

(二) 以下を傳灯本勸修本は「即以柱杖杖之。集衆焚燒衣

鉢道具。遣逐從偏門……」とある。

大宋僧史略には

或有過者主事示以柱杖。焚其衣鉢。謂之誡罰。

此等は懲罰で嚴格な制裁であることがわかる。

(注) 詳此條制。有四種。一不汚清衆。生恭信心。故三業不善

不可共住。準律合用梵壇治之。當驅出院。清衆既安恭信

生矣。二不毀僧形。徇佛制。故隨宜懲罰。得留法服。後必悔

之。三不擾^(七)公門^(八)。省獄訟^(九)。故。四不洩^(一〇)于外^(一一)。護綱宗^(一二)。故。四來同居凡聖孰辨。且如來應世尙有三六群之黨。況今像末豈得^(一三)三無。見有輩^(一四)。但見^(一五)。二僧有過。便雷同議^(一六)。殊不知以^(一七)。輕衆慢^(一八)。法其損益甚大。今禪門若無^(一九)。妨害者。宜依^(二〇)。百丈叢林格式^(二一)。量事區分。雖立^(二二)。法防^(二三)。姦未^(二四)。爲賢士。然寧可^(二五)。有法而無^(二六)。犯。不可^(二七)。有犯而無^(二八)。教推^(二九)。百丈禪師護法之益^(三〇)。其爲^(三一)。大矣。

(一) 勅修本傳灯本には「此一條制」とある。(二) 勅修本傳灯本には無し。(三) 勅修本傳灯本には「心」無し。(四) 傳灯本は「三業不喜……安泰信矣」迄を割註とする。(五) 傳灯本は「梵壇法」とする。(六) 「隨宜……必每之」迄を割註とする。(七) 傳灯本勅修本は「宗綱」とする。(八) 以下最後迄傳灯本は割註とする。(九) 「何見有輩」は傳灯本勅修本には無し。(一〇) 「同」を傳灯本勅修本は「例」とする。(一一) 傳灯本勅修本には「若稍無妨害」とある。(一二) 勅修本は「規式」とする。(一三) 勅修本傳灯本は「不」とある。(一四) 勅修本傳灯本は「其大矣哉」とある。

これは懲罰の四つの効果を挙げたものである。
(三) 今禪門別行由^(一)百丈之始略敘^(二)三大要^(三)二偏示^(四)後來學者^(五)令^(六)忘^(七)其本^(八)也。

(一) 勅修本傳灯本は「獨」とする。(二) 以下は勅修本は「自此老^(一)始清規大要偏示^(二)後學^(三)……」とある。(三) 傳灯本には「今略敘^(四)三大要^(五)……」とある。(四) 傳灯本は「示^(六)後代學者^(七)」とある。

之に續いて傳灯本は、「其諸軌度山門備焉。」とし、勅修本は、「其諸軌度集詳備焉。億幸叨^(一)睿旨^(二)刪^(三)定傳燈^(四)成^(五)書圖^(六)進^(七)因爲序

古清規について

引「景徳改元歲次甲辰良月吉日書」と付加している。これ即ち楊億の自署と見らる可きものであるが、景德元年(一〇〇四)は楊億が傳燈錄の爲めに序を書いた歲でもある。然してこれに依れば楊億は傳燈錄を刪定せる因縁に依て更に古清規序を書いたと云うのであるが、然らば時間的に傳燈錄編纂後の執筆となつて之と同文のものが録中に收録されている事實と符合しない。一應傳燈錄の刪定を終つて後に、更に刪定者自身の文を加入する様なことは殆ど考へられない。然して傳燈本と勅修本の末文の變化しているのは偶然とは思はれない。明らかに本文をして獨立せる清規書の序なりと信ぜしめんとする作爲の跡が讀み取られるのである。又傳燈本及び勅修本の末に、「今忘^(一)本也。」と云う點に存するのであつてこの句意よりすれば或は清規書の序文と云うよりも背後に漸く清規の根本精神を忘却し去らんとする時代の趨勢が看取される様^(二)に思ふ。

以上の理由に依り勅修百丈清規卷末の古清規序は楊億の筆に成るものではなく景德傳燈錄の禪門規式を一部改作して、之に古清規序なる標題を付したものであらう。

更に禪苑清規の百丈規繩頌では(五)に引續いて。

諸方自^(一)古共遵^(二)所濟^(三)衆務急^(四)弊之者^(五)凡三十件^(六)用示^(七)三方來切在^(八)詳稟^(九)確志維衛^(一〇)永成^(一一)軌範^(一二)俾^(一三)醜迹^(一四)穢聲無^(一五)流^(一六)外聽^(一七)不^(一八)唯叔世^(一九)禪林之光茂^(二〇)亦乃護法^(二一)之一端耳^(二二)其事件名數條牒如左

とあつて、以下三十件が述べられてある。これ等は凡て禪苑清規の著者の言であらう。其の内容は大體詳細に日常生活の行動の規定並びに禁止箇條が擧げられてある。それだけ叢林が遊惰に流れたことを現はしているのであらう。

以上で以て百丈の制定した處の清規の内容をはかり知る事が出来るのであるが、其の根本は大宋僧史略に、「凡諸新例厥號『叢林』、與律不同自百丈之始也。」と云ひ又宋高僧傳にも「其諸制度與毗尼師一倍相翻。」とある様に、律制そのまゝではなかつたのである。宋高僧傳の系に「雖非佛語制諸方爲清淨不得不行也。」と結んで居るから、律制のまゝでは無くともよいわけである。叢林には叢林に適する清規が立てられるのは當然であらうと思う。又あくまで嚴格に修行中心や現存清規の精神を基礎付けている點に於て、若しも現存清規書の編者がこれを見たとするならば、内容は現在とは相當變つてゐるであらうと思う。

註1 宇井伯壽著 禪宗史研究八二頁

宮坂哲文著 禪に於ける人間形成六頁

註2 祖堂集卷四 百丈懷海傳

註3 景德傳燈錄卷六 百丈懷海禪師項末禪門規式

註4 禪學研究三十一號（昭和十四年七月發行）

註5 至元後戊寅春三月とある（一三三八）

註6 續藏經第二編第十七套第一冊

註7 續藏經第二編第十七套第一冊

註8 宇井伯壽著 佛教思想研究 四五四及六三八頁

禪宗史研究 一〇及八五頁

註9 禪學研究三十一號 木村靜雄氏「古情規考」